

能求と所求

伊藤教宣

弘法大師空海は『大日經』（正藏・十八・一）に説かれ

ている菩提心思想を非常に重要視しており、その思想を繼承しながら、多くの著作を撰述し、菩提心について説かれていたのでは無からうか。そのようなことからすれば、空海の著作の中にみられる菩提心思想は『大日經』に示される菩提心思想を受け継いでいるはずである、と言うことができるであろう。空海の菩提心思想について考える場合、多くの著作の中で特に注目しなければならないものは『三昧耶戒序』（弘全・二・百三十二～百三十九）である。ここでは

今所授三昧耶仏戒者。則是大毘盧遮那自性法身之所説真言曼荼羅教之戒也。（中略）欲人此乗修行者。先發四種心。一信心。二大悲心。三勝義心。四大菩提心。

といい、大菩提心説段の直前で

真言門菩薩超此諸住心等。發菩提心行菩提行。

と言っており、そこで第四番の大菩提心について

四言菩提心者。此有二種。一能求菩提心。二所求菩提心。

という二種をあげ、能求の菩提心について

能求心者。譬如有人欲依善与惡。必先標其心而後行其行求菩提之人亦復如是。云云

と言っている。いわゆる三昧耶戒（毘盧遮那自性法身・真言曼荼羅教の戒）を授けられる場合、真言行人は四種の心を発さなければならぬのであり、その第四番目に大菩提心（能求・所求）を発さなければならないと言っているのである。

能求・所求と言うことは『大日經（住心品）疏』（正藏・三十九・五百八十八・a）で

而問仏言。菩提心名爲一向志求一切智智。若一切智智。即是菩提心者。此中誰爲能求誰爲所求。誰爲可覓。誰爲覓者。

と言われるところに見ることができる。これは『大日經』

「住心品」（正藏・十八・一・c）の

仏言秘密主。自心尋求菩提及一切智。云云

と言われている菩提（心）と一切智（智）とに対する解釈で、菩提心と一切智智を修行者自身の心の中に求めるべきで

あることから、菩提心を能求に、一切智智を所求に配当して、共に自心に求めるべきものとしており、『一向志求一切智智』のことを能求、いわゆる能求の菩提心とみることができるのである。そうして『三昧耶戒序』に至ると「先ず四種の心を発すべし」と言つて、そのなかに「大菩提心」が上げられていることなどから、『大日経疏』や『三昧耶戒序』に説かれている《能求の菩提心》については、單純に菩提（『大日経疏』で言えば所求たる一切智智。『三昧耶戒序』で言えば所求の菩提心たる無尽莊嚴金剛界の身、大毘盧遮那、四種法身、四種曼荼羅）を求める心、いわゆる菩提心と言う解釈がいつからか生まれてきて、現在でもそのような考え方がされていることがあり、筆者自身も最近までそのような考え方に惑わされながら、いろいろと考えていたのである。それは『三昧耶戒序』で最初に「四種の心を発すべし」といい、その第四番目に大菩提心があげられ、そのうちの一つが能求の菩提心であること、また大菩提心が説かれる直前において「真言門の菩薩は此の諸の住心等を超えて、菩提心を発して菩提の行を行すべし」と言われていることなどから、特に能求の菩提心については菩提を求める心、菩提心のことで、その心を発すべきである、という解釈が生まれてきたのである。

それでは、能求の菩提心は本来どのように理解されなければ

ばならないか、そのことについて考察してみようと思う。

『大日経疏』では『大日経』の「菩提（心）」と及び一切智（智）とを自心に尋求すべし」という文句に対しての解釈として菩提心と一切智智とにそれぞれ能求と所求とを当てはめたのである。即ち、『大日経疏』での能求と言われるものは『大日経』で示される菩提心のことであると言わなければならない。『大日経』に説かれている菩提心については已に考察を試みたこともあり（拙稿を参照していただければ）詳しく論ずる必要は無いが、その概略を示せば、それは菩提を求める心、菩提心、あるいはその心を発するいわゆる発菩提心などと言われるものでは無く、菩提を志求している菩薩、悟りを求めている菩薩が、修行しているその過程において、特定の境地に到達した《心の状態》を意味しているのである。即ち、「住心品」の心続生段で説かれている最終段階の境地たる「極無自性心の生まれたとき」に生まれて来るもの、得られるものとして説かれている、そのような菩提心なのである。しかもこの菩提心は真言行人にとって成仏の《因》なのであり、この成仏の因とされている菩提心を得た真言行人は菩提心を得た後の修行、菩提の行を修習しなければならないのである。このような『大日経』での菩提心について『大日経疏』が「能求の菩提心」という解釈をしたことは明らかであらう。

さてそこで、『三昧耶戒序』に説かれている大菩提心（能求と所求の菩提心）について、以上のようにみてきた『大日經』・『大日經疏』所説の菩提心思想を考慮にいれながら、再び考えなおしてみなければならぬであろう。先ず能求について

能求心者。譬如有人欲為善与惡。必先標其心而後行其行云云。求菩提之人亦復如是。（中略）既知狂醉在三界之獄。熟眠臥六道之藪。何不厭神通之車速歸本覺莊嚴之床。此則能求之心。

と言ひ、所求については

所求心者。所謂無尽莊嚴金剛界身是也。大毘盧遮那四種法身四種曼荼羅。皆是一切衆生本來平等共有。（中略）若能觀日月之輪光。誦声字之真言。發三密之加持。揮四印之妙用。則大日之光明廓周法界。無明之障者忽歸心海。無明忽為明毒藥乍為藥。五部三部之尊森羅円現。剎塵海滴之仏忽然涌出。住此三昧諸仏名秘密三摩地。

と言っている。ここで空海は何を言おうとしているかといえは、先ずはじめに「菩提心を發して菩提の行を行すべし」と言っていることも合わせて考えなければならぬのであるが、求める当体、いわゆる《所求の菩提心》に対するものとして《能求の菩提心》を示していることを考えなければならぬ。即ち、能求の菩提心は所求の菩提心に対応しているものであつて、対をなすものである。先の「菩提心を發して」と言われ

能求と所求（伊藤藤）

る菩提心は当然能求の菩提心のことであつて、能求の菩提心が発つたときから行ぜられるのが菩提の行であり、その行の内容はといえは「能く日月の輪光を觀すること」・「声字の真言を誦すること」・「三密の加持を發すること」・「四印の妙用を揮うこと」などであり、それらの行によつて、「大日の光明は廓として法界に周く、無明は忽ちに明となり、毒藥は乍ちに藥となり、五部三部の尊は森羅として円現し、剎塵海滴の仏は忽然として涌出する」のであるが、これはまさに所求の菩提心の完成した境地のことである。真言行人はこのような境地、境界、三昧に到達するための行によつて、そこに住まなければならないのであり、そのような住すべき境地、境界、三昧のことを《秘密の三摩地》と言っているのである。

『大日經』では、成仏の因たる菩提心の生じたその後の行が「具緣品」以下に説かれている曼荼羅の行、大悲胎藏生曼荼羅の行であると考えられるのであり、それがまさに能求の菩提心を獲得してからの行と言ふことである。また「菩提心論」（正藏・三十二・五百七十二・b）では、菩提心を發してから後の行すべき「菩提の行」の種類として三種の菩提心（勝義・行願・三摩地）が説かれているけれども、その第三番目の「三摩地の菩提心」段で説かれている修行の内容、方法というものが真言行人としての菩提心を發してからの行、菩提の行であると言ふことができるのである。そうして『三

昧耶戒序』によれば、真言行人は真言行人としての菩提心、いわゆる《能求の菩提心》を發して（獲得して）から真言行人としての本當の行が始まるのであって、その修行の三昧に住しているときに秘密の三摩地であり、行が成就したときに所求の菩提心たる無尽莊嚴金剛界の身・大毘盧遮那・四種法身・四種曼荼羅を獲得することができるのである。即ち『三昧耶戒序』に説かれている「能求の菩提心」は『大日經』「住心品」に説かれている菩提心と同じものであり、ある境地に到達したときに生まれてくるもの、得られるものであって、發菩提心などという、發すものではないのである。能求の菩提心とはそのような菩提心なのであるが、空海は弟子等に（秘密）三昧耶（仏）戒を授けて、真言行人としての修行をさせようとするときに、先ず四種の心を發させようとする、その第四番目に《能求の菩提心》と言うものをおいたために、能求の菩提心について菩提を求める心、菩提心と言ひ、その心を發すいわゆる發菩提心という解釈が生まれてきたのではないかと思われる。それは『大日經』に説かれたところの獲得される（生まれる）菩提心のことを、『三昧耶戒序』においてはそれを「發すべし」と言っているからである。

三昧耶戒のことをまた《菩提心戒》とも言い、「菩提心を捨離すべからざる戒」と言う意味において重要視されている

のであるが、この戒は菩提心を發した（生まれた、得られた）ときに授けられるもので、『大日經』で言えば極無自性心の生じたときに菩提心が得られ、そこで初めて授かる戒なのであり、また『即身成仏義』（弘全・一・五百六）に『金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌』（正藏・二十・五百三十五・b～c）から引用されている菩提心戒に関する記述（弘全・一・五百十四～五百十五）はそのことを意味しているのである。『三昧耶戒序』も当然そのような意味において撰述されたもので、真言行人が三昧耶戒を授かる前提として能求の菩提心（そのときには四種心たる信心・大悲心・勝義心も含めて）を發していなければならなかったのであって、このような菩提心（能求の菩提心）を發して（獲得して）から授かる戒であることから菩提心戒と言うのである。真言行人は極無自性心の生ずる境地に到達して成仏の因たる菩提心を獲得して、そこで曼荼羅阿闍梨に逢つて秘密三昧耶仏戒（菩提心戒）を授かり、曼荼羅を見ることができ、そうして曼荼羅内に引入されて曼荼羅の行、いわゆる菩提の行を修習することになるのである。

* 印度学仏教学研究・三十五―二。大正大学綜合仏教研究所年報・八及び九。

ハキードワード／菩提心、『三昧耶戒序』、能求、所求

（大正大学綜合仏教研究所研究員）